

家族造形法の深度

12 事例検討における家族造形法の展開

(続き)

早樫 一男

はじめに

事例提出者（彫刻家役）の作る作品（家族彫刻）は、あくまでも事例提出者によるケース（家族）のアセスメントや見立てを視覚化したものです。その造形作品を第一段階として、家族（役）の声を聴きながら、さまざまな角度から、さらに家族の理解を深めていきます。

その後の展開（第二段階）として、「居心地のよい状況（関係）を作る 確認する」や「家族が自ら動く 他の家族の動きに触発されて動く」といったバリエーションについて、前回、紹介しました。

今回は、さらにさまざまなバリエーション（私がよくやるアレンジ）の紹介です。

動きをつける

彫刻家役が見立てた家族造形作品（第一段階）において、動きをつけることがあります。

例えば、「母は台所で食事の支度をしている（包丁で野菜を切る）」や「長女は顔（視線）を左右に動かす（父や母を交互に見る）」といった動き、「家族の間を動きまわる（次男は母と祖母の間を行ったり来たりする）」などです。

動きを指示された役の人は、一分間、その動きを繰り返します。そして、静止している人と同じように、一分間の間で感じることを後ほどフィードバックします。動きが付与されることによって、時には、さらに、新たな気づき生まれ、興味深いコメントにつながる場合があります。

担当者（彫刻家役）が 家族メンバーの役になってみる

第一段階で作った造形でのフィードバック後、家族役を担当者自身が交代して、担ってみるという展開です。例えば、担当者が苦手だと感じていたり、理解しがたいと思っている家族メンバーを引き受けてみるといったものです。また、問題だと言われ

ている家族メンバー（本人）になってみることもできます。

もちろん、一分間、静止してみて、どのようなことを感じるかということについて、集中します。この展開は、体感的な家族理解につながるものです。もちろん、援助者自身の感受性訓練にもなります。

援助職に携わっている者は、対人援助場面では援助者という役割で機能しています。一方、家庭では夫や妻、父親や母親、息子や娘といった役を演じていると言えるかもしれません。もちろん、職場でもいろいろな役割を担っていることでしょう。

さまざまな家族のストーリーの中での家族役を引き受けてみるということはとても面白いものだと、個人的な感想を持っています。人生の幅や深みが広がるような気がします。

担当者を入れた 援助（治療）構造を造形する

第一段階で作った家族造形の中に、援助者を置いてみるのです。担当者本人が家族造形の中に入ることもできますし、担当者役を作って置いてみることもできます。また、現在の援助者の位置を配置することはもちろんのこと、今後、援助を考えている場合はその位置取りについて、置いてみることもいいでしょう。

援助者のスタンスを家族はどのように受け止めているのか、家族に受け入れられやすい（受け入れがたい）援助者の位置取りについても、具体的に、イメージする上でも、参考になるヒントを手に入れることができるでしょう。

家族史を順に作っていく

家族は時間経過の中で変化していきます。家族の変化に沿って、さまざまな感情が生まれたり、消えたりしていきます。日常生活もそのような繰り返しかもしれません。

家族史というのは、夫婦だけの頃（親世代との同居も含む）、子どもの誕生、家族メンバーとの別れ（離別や死別）や新たな家族との出会い（夫婦の再婚や義理のきょうだいの登場）などです。

家族の歴史に沿った造形を丁寧にたどる（作ってみる）ことを通して、家族メンバーの気持の変遷について、さまざまな発見をすることができます。

ロープ（ひも）の導入

家族メンバーのつながりを視覚化するものとして、ロープ（ひも）を使うことがあります。手芸用品店で手に入るさまざまな色のロープ（ひも）を私は用意しています。

彫刻家役が家族のつながりの象徴として家族メンバー間の中に持たせる（つなげる）場合もあれば、家族メンバーが選んだロープ（ひも）を他の家族メンバーに渡すように指示することもあります。

ロープ（ひも）は、さまざまな象徴として機能します。家族間のコミュニケーションの有無やありよう、つながり（「絆」と言われるもの）だけでなく、拘束やしほりや支配（まさにヒモ）の象徴となる場合もあります。また、ロープの色彩は感情を象徴するものとして、意味を持つことがあります。

理想的と考える関係 (援助プラン 家族イメージ) を作る

イメージとしては、前回紹介した「居心地のよい状況（関係）を作る 確認する」に近いものです。

まず、家族の見立てを造形にした作品（第一段階）をベースとして、フィードバックを確かめた後、進行役が「家族自身がこうあればいいなあという家族の風景（造形）をイメージして、家族役が自ら動いてみてください」と教示する場合があります。

事例提出者（彫刻家役）は家族の動き（変化）を注意深く観察します。誰から動き出したのか、その変化の動きに触発されたのは誰か、等々、家族システムの変化を見るのです。

家族の動きがたまったところ（家族が作り上げた造形作品）で、一分間、静止した後、その感想を尋ねます。その際には、最初の造形との違い、動いている際の気持ちなども確かめるようにします。

また、彫刻家が「こうあればいいなあ」という造形（家族の変化、治療目標）作ってみるよう指示することもあります。静止後、確かめるポイントは前述のものと同じです。

これは、援助者の思いと家族の思いのすり合わせの機会です。前回の「居心地のよい状況（関係）を作る 確認する」でのコメントと重なる部分です。

おわりに

彫刻家で作った家族造形の観賞（家族システムの理解）し、家族役から発せられた

声をに耳を傾け、さらに浮かんだ展開を試してみてください。それぞれの現場に合わせた展開や工夫ができると思います。

ただし、どのような造形作品、展開であっても、限られた空間（会場）の中での再現であるということは肝に銘じておきたいと思います。

宣伝です

短信でも触れましたが、月刊の「ケアマネジャー」（中央法規出版）2013年2月号から、～SteepでDeepな援助学～「家族造形法を使った事例検討会」を連載（数回の予定）しています。

興味のある方は、是非、購読ください！！